

高次微分などについて

東大 教養 服部 昭

§ 1. 高次微分

Osborn [1], Nakai [2] で研究されている high order derivation を少し異なった観点から扱うことにより、簡易化と一般化が可能であることを述べる [3]。以下で扱う環は単位元をもち、加群は unitary とする。

1.1.  $R$  を可換環,  $A$  をその上の可換多元環とする。  $A$  の乗法  $\mu: A \otimes A \rightarrow A$  の核を  $J$  で表わせば,  $J$  は  $A \otimes A$  の両側イデアルで, 左イデアルとしては

$$J_a = 1 \otimes a - a \otimes 1 \quad (a \in A)$$

によって生成される。明らかに

$$(1.1) \quad J \cong A \otimes A/R; \quad a_j \bar{b} \leftrightarrow a \otimes \bar{b} \quad (A\text{-左加群の同型})$$

$M$  を  $A$ -左加群とする。  $\text{Hom}_R(A, M)$  は作用  $(a \otimes b)f = a \circ f \circ b$  により  $A$ -両側加群になる。  $g$  次の differential operator の加群を次によって定義する:

$$D_g(A, M) = \{ D \in \text{Hom}(A, M) \mid J^{g+1}(D) = 0 \}$$

$J$  はイデアルだから, この条件は  $J^{\delta+1}(D)(1) = 0$  と同値である. とくに  $D_0(A, M) = \text{Hom}_A(A, M) \cong M$ . 便宜上  $\text{Hom}_R(A, M)$  を  $D_\infty(A, M)$  で表わせば,

$$(1.2) \quad \begin{array}{ccc} D_\infty(A, M) (= \text{Hom}_R(A, M)) \cong \text{Hom}_A(A \otimes A, M) & , & F(\omega) = \omega(D)(1) \\ D & \longleftrightarrow & F & , & D(\alpha) = F(1 \otimes \alpha) \end{array}$$

これを  $D_g$  に制限すれば,

$$(1.3) \quad D_g(A, M) \cong \text{Hom}_A((A \otimes A)/J^{\delta+1}, M)$$

次に  $g$  次 high order derivation の加群:

$$\text{Der}_g(A, M) = \{ D \in D_g(A, M) \mid D(1) = 0 \} \quad (g = 0, 1, \dots, \infty)$$

とくに  $\text{Der}_0(A, M) = 0$ ,  $\text{Der}_\infty(A, M) = \{ D \in \text{Hom}_R(A, M) \mid D(1) = 0 \}$ .

また  $\text{Der}_1(A, M)$  が通常の derivation の加群である.

(1.1) により

$$(1.4) \quad \text{Der}_\infty(A, M) = \text{Hom}_R(A/R, M) \cong \text{Hom}_A(J, M); \quad \begin{array}{l} F(\omega) = \omega(D)(1) \\ D(\alpha) = F(j_\alpha) \end{array}$$

これを  $\text{Der}_g$  に制限すれば,

$$(1.5) \quad \text{Der}_g(A, M) \cong \text{Hom}_A(J/J^{\delta+1}, M)$$

$M = A$  のとき, 合成の積は  $\rightarrow$  して,

$$j_\alpha(D_1 D_2) = j_\alpha(D_1) \cdot D_2 + D_1 j_\alpha(D_2)$$

よって  $D_p(A, A) D_q(A, A) \subset D_{p+q}(A, A)$  で,  $D(A, A) = \bigcup_{g < \infty} D_g(A, A)$

は filtered algebra の構造をもつ.

このような扱い方で [2] Chap I の諸結果を導くことについては [3] 参照. ここでは最近の次の結果にのみ示れる.

定理 (Kikuchi [4]). 体の拡大  $L/K$  について,

有限次連続非分離的  $\iff J$  nilpotent  $\iff D(L, L) = \text{Hom}_K(L, L)$

証明  $\implies$  は trivial. 最初の  $\iff$  は体論から容易. 次に

$D(L, L) = \text{Hom}(L, L)$  と仮定すれば, (1.2), (1.3) により

$\text{Hom}_L(L \otimes L, L) = \bigcup_{\mathfrak{g}} \text{Hom}_L(L \otimes L / J^{\mathfrak{g}+1}, L)$ .  $L$  が体だから, これは

$J$  が nilpotent でなければ不可能.

$A$  が augmented のとき, 少なくとも多項環中加群型  $\varepsilon: A \rightarrow R$  があるとき,  $\mathfrak{m} = \ker \varepsilon$  とおけば,

$$\mathfrak{m} = \{ i_a = a - \varepsilon(a) \cdot 1 \mid a \in A \}$$

$\varepsilon$  を通して  $R$  を  $A$ -加群と思えば,  $f \in \text{Hom}_R(A, R)$  には  $j_a(f)$

$$j_a(f) = f \circ i_a. \quad \text{よって}$$

$$(1.6) \quad D_{\mathfrak{g}}(A, R) = \text{Hom}_R(A/\mathfrak{m}^{\mathfrak{g}+1}, R)$$

1.2.  $\text{Der}(A, V)$  によって 両側 加群  $V$  への derivation の加群を表わすとき, 次は split exact sequence を与す:

$$(1.7) \quad \begin{array}{ccccccc} 0 & \rightarrow & M & \rightarrow & D_{\infty}(A, M) & \rightarrow & \text{Der}(A, \text{Hom}_R(A, M)) \rightarrow 0 \\ & & & & D & \mapsto & d \quad ; \quad d(a) = j_a(D) \\ \text{splitting} & & & & D & \leftarrow & d \quad ; \quad D(a) = d(a)(1) \\ & & & & \text{Der}_{\infty}(A, M) & \cong & \text{Der}(A, \text{Hom}_R(A, M)) \end{array}$$

これを  $D_{\mathfrak{g}}$  に制限すれば, 同じ写像で次の split exact sequence が得られる:

$$(1.8) \quad 0 \rightarrow M \rightarrow D_g(A, M) \rightarrow \text{Der}(A, D_{g-1}(A, M)) \rightarrow 0$$

$$\text{Der}_g(A, M) \cong \text{Der}(A, D_{g-1}(A, M))$$

一方, 一般に

$$(1.9) \quad \text{Der}(A, V) \cong \text{Hom}_{A \otimes A}(J, V); \quad \begin{array}{l} f(\omega) = \omega(d)(1) \\ d \longleftrightarrow f \\ d(a) = f(j_a) \end{array}$$

よって (1.5), (1.8), (1.9) と周知の自然同型を組み合わせて, 次の可換な diagram が得られる:

$$(1.10) \quad \begin{array}{ccc} \text{Der}_g(A, M) & \cong & \text{Der}(A, D_{g-1}(A, M)) \\ \cong & & \cong \\ \text{Hom}_A(J/J^{g+1}, M) & \cong & \text{Hom}_{A \otimes A}(J/J^{g+1}, \text{Hom}_R(A, M)) \end{array}$$

左上の  $D$  と右下の  $f$  は, 次の簡単な関係で結ばれている:

$$\omega(D) = f(\omega) \quad (\omega \in J)$$

一般化 1. たとえば有限群の交換子に関する構造分析が群環の differential structure という感じのものに関連するようになり, 非可換環の場合にも関心が持たれる. 事実, 上記の諸事項は,  $A$  が非可換でも, 次のように修正することによって, やはり成り立つ.

$$J = \ker(A \otimes A^0 \rightarrow A) \quad (A^0 \text{ は } A \text{ と逆同型な多元環})$$

$$J^{(g)} = j_{a_1} \cdots j_{a_g} \quad (a_i \in A) \text{ 全体の生成する左イデアル.}$$

たとえば,  $D \in D_2(A, M)$  の条件は,

$$D(abc) - (aD(bc) + bD(ac) + cD(ab)) + (cbD(a) + caD(b) + baD(c)) = 0$$

2. 両側加群  $\text{Hom}_R(A, M)$  のかわりに, 一般に  $\text{Hom}_R(P, M)$  をとれば,  $D_g(P, M)$  が定義される. とくに  $P$  が有限生成射影的ならば, 多くのことが自然に拡張される. たとえば, 次の split exact sequence が成立する:

$$0 \rightarrow \text{Hom}_A(P, M) \rightarrow D_g(P, M) \rightarrow \text{Der}(A, \text{Der}_{g-1}(P, M)) \rightarrow 0$$

ただし,  $\text{Der}_g(P, M)$  に相当するものは canonical には定義されない. とくに  $M = P$  とすれば, これらのことは  $\text{Hom}_R(P, P)$  の構造分析に資するところがある.

1.3. 以下に用いられる Hopf algebra に関連した用語等については Sweedler [5] 参照.

$A$  を bialgebra<sup>1)</sup>,  $\Delta$  をその comultiplication,  $\varepsilon$  を counit とする.  $A$  の right  $A$ -comodule structure から, left  $A^*$ -module structure がひきおこされる.  $f: A \rightarrow A$  が right  $A$ -comodule map なることと left  $A^*$ -module map なることは同値で, このとき  $f$  を左不変と呼ぶ. 左不変な  $f$  の全体を  $\text{Hom}^l(A, A)$  で表わせば,

$$(1.11) \quad \begin{aligned} \text{Hom}^l(A, A) &\cong A^* & \varphi &= \varepsilon \circ f \\ f &\longleftrightarrow \varphi & f(a) &= a\varphi = (\varphi \otimes 1) \Delta(a) \end{aligned}$$

制限して,

1) 係数環を体  $K$  とする.  $A^*$  で  $A$  の linear dual を表わす.

$$(1.12) \quad D_q^l(A, A) \cong D_q(A, K)$$

$$\text{Der}_q^l(A, A) \cong \text{Der}_q(A, K)$$

$m = \ker \varepsilon$  が有限生成ならば,  $D(A, K) = \cup D_q(A, K)$  は bialgebra である (乗法は convolution). もし  $A$  がさらに Hopf algebra ならば,  $D(A, K)$  も Hopf algebra である. 上記の  $A$  の left  $A^*$ -module structure により,  $A$  は  $D(A, K)$ -module algebra となり, smash product  $A \# D(A, K)$  が定義される.

定理.  $A$  が Hopf algebra であり,  $m$  が有限生成のとき,

$$M \otimes D_q(A, K) \cong D_q(A, M); m \otimes \bar{0} \mapsto \bar{D}; D(a) = (\bar{D} \cdot a) m$$

$$\text{と } \llcorner \text{に } A \# D(A, K) \cong D(A, A)$$

これは Heyneman-Sweedler [6] §2 の主要結果であるが, ここでは  $M$  が algebra であり algebra map  $A \rightarrow B$  を通して  $A$ -加群となっている場合が扱われている.

証明.  $S$  を  $A$  の antipode とするとき, 下記は可換で,  $\Phi, \Psi$  は多元環同型である:

$$\begin{array}{ccccccc} 0 & \longrightarrow & J & \longrightarrow & A \otimes A & \xrightarrow{\mu} & A \longrightarrow 0 \\ & & \cong & & \uparrow \Phi \downarrow \Psi & & \parallel \\ & & & & & & \Psi(a \otimes b) = a \Delta(b) \\ & & & & & & \Phi(a \otimes b) = \sum a S(b_{(1)}) \otimes b_{(2)} \\ 0 & \longrightarrow & A \otimes m & \xrightarrow{1 \otimes \varepsilon} & A \otimes A & \xrightarrow{1 \otimes \varepsilon} & A \longrightarrow 0 \\ & & & & & & (\text{ここに } \Delta b = \sum b_{(1)} \otimes b_{(2)}) \end{array}$$

よってイデアルの同型

$$A \otimes m \cong J; \quad \begin{array}{ccc} 1 \otimes i_a & \longmapsto & \sum S(a_{(1)}) j_{a_{(2)}} \\ \sum a_{(1)} \otimes i_{a_{(2)}} & \longleftarrow & j_a \end{array}$$

がひきおこされる。従ってまた、 $A \otimes m^{g+1} \cong J^{g+1}$ 。そこで

$$\begin{aligned} M \otimes D_g(A, K) &= M \otimes \text{Hom}(A/m^{g+1}, K) \cong \text{Hom}(A/m^{g+1}, M) \\ &\cong \text{Hom}_A(A \otimes A / A \otimes m^{g+1}, M) \cong \text{Hom}_A(A \otimes A / J^{g+1}, M) \\ &\cong D_g(A, M). \end{aligned}$$

## § 2. 高階微分の $p$ -多環への応用 [4]

2.1.  $A$  を  $R$  上の (必ずしも可換でない) 多環とし、

$$A[T]_g = A[T]/(T^{g+1}), \quad t = T \pmod{T^{g+1}}$$

とおく。  $B$  を  $A$  の部分多環とする。 linear map の列  $D =$

$$\{D_1, \dots, D_g\} \quad (D_i: B \rightarrow A),$$

$$D_t: B \rightarrow A[T]_g; \quad b \mapsto b + D_1(b)t + \dots + D_g(b)t^g$$

が  $R$ -多環準同型になるものは higher derivation of rank  $g$

(略:  $g$ -h. d.) と呼ばれる。  $D$  はまた  $R[T]_g$ -多環準

同型  $B[T]_g \rightarrow A[T]_g$  と見ることもし得る。  $t$  には  $g$ -h. d.

$A \rightarrow A$  の全体は乗法群をなす。

$d_i \in A$  ( $i=1, \dots, g$ ) によって、

$$d_t = 1 + d_1 t + \dots + d_g t^g$$

による  $A[T]_g$  の内部自己同型は、  $g$ -h. d.  $A \rightarrow A$  を定義す

る。これを  $\{d_1, \dots, d_g\}$  による inner higher derivation と

呼ぶ。

定理. 次のいずれかの仮定の下で、任意の h. d.  $B \rightarrow A$  は

inner h.d.  $A \rightarrow A$  に拡張される.

a)  $B$ : separable algebra (定義は [8])

b)  $A$ : central separable,  $B$ : (left or right) semi-simple (定義は [9]).

特殊な場合が Jacobson [10] で与えられている. また Sweedler [11] では Hopf algebra の観点から, この型の一般的な定理が述べられている.

2.2  $K$  を標数  $p (\neq 0)$  の体,  $A$  をその上の central separable algebra とし,  $K$  上の純非分離的拡大

$$L = K(u), \quad u^{p^n} = \tau \in K$$

を極大可換部分環として含むものとする. いわゆる  $p$ -algebra の考察において, このような場合が基本的である. Schmid と Witt は次の型の標準形に到達した [12]:

一般に可換環  $X$  の長さ  $n$  の Witt vector の加法群を  $W_n(X)$  で表わし,

$$f(x_0, \dots, x_{n-1}) = (x_0^p, \dots, x_{n-1}^p) - (x_0, \dots, x_{n-1})$$

とおく. また  $\underline{1} = (1, 0, \dots, 0)$  とする.

$A = (\tau, \beta]$  ( $\tau \in K^*$ ,  $\beta \in W_n(K)$ ): 次によつて定義される  $K$  上  $p^{2n}$  次元の central separable algebra を表わす:



生成元:  $u, b_0, \dots, b_{n-1}$

関係:  $b_i$  同士は可換,  $u^{-1}(b_0, \dots, b_{n-1})u = (b_0, \dots, b_{n-1}) + 1$

$$u^{p^n} = \tau, \quad \rho(b_0, \dots, b_{n-1}) = \beta$$

$A$  は  $K(u)$ ,  $K(b_0, \dots, b_{n-1}) = K(\frac{1}{\rho}\beta)$  を極大可換部分環にとり、後者は  $p^n$  次の巡回拡大の標準形であり、その Galois 群の生成元が  $A$  において  $u$  による内部自己同型に拡張されることを、上記の関係は意味している。

$(\tau, \beta]$  は  $K$  の乗法構造と加法構造の相互性を表現するものであろうが、これでは  $K(u)$  を主体とするとき、 $K(\frac{1}{\rho}\beta)$  は何を意味するか?  $K(u)$  は純非分離的で、高階微分によって統制されるから、 $K(u)$  の高階微分を  $A$  で inner 化するところから  $K(\frac{1}{\rho}\beta)$  が産み出されると期待してよいであろう。事実、exponent 1 の場合には、微分の inner 化が種々の機会に利用されている。Exponent  $\geq 2$  の場合、実用的には帰納法的処理で十分なことが多いであろうが、この辺の機構を少し分析してみたい。

$n=1$ .  $D(u) = u$  で定義される微分  $D: L \rightarrow L$  が、 $b \in A$  による  $A$  の内部微分に拡張されれば、 $b^p - b = \beta \in K$ . このとき、 $A \cong (\tau, \beta]$ .

$n=2$ .  $L$  の  $p$ -h.d.  $D = \{D_1, \dots, D_p\}$  を次の条件で定義する:

$$D_i(u) = \frac{1}{i!} u \quad (i=1, \dots, p-1), \quad D_p(u) = 0$$

このとき,  $D_i = \frac{1}{i!} D_1^i$  ( $i=1, \dots, p-1$ ).  $D$  を inner 化する  $\{d_1, \dots, d_p\}$  とし,  $d_i = \frac{1}{i!} d_1^i$  をみたすものがとれる. そのとき,

$$(2.1) \quad u^{-1} d_1 u = d_1 + 1$$

$$(2.2) \quad u^{-1} d_p u = d_p + \sum_{i=1}^{p-1} \frac{1}{i!(p-i)!} d_1^i$$

適当な修正により,

$$d_1^p - d_1 = \beta_0 \in K, \quad d_1 d_p = d_p d_1$$

をみたすようにできる. そのとき,

$$\mathcal{G}(d_1, d_p) = (\beta_0, \beta_1) \in W_2(K)$$

よって,  $A \cong (\mathbb{Z} / \beta_0, \beta_1]$ .

2.3 上記  $n=1, 2$  の場合は,  $u$  は巡回的 Galois 群の canonical generator を定めて,  $u$  を inner 化することと相当する.  $n \geq 3$  の場合,  $u$  を具体的に遂行するのは技術的に困難である. そこで Galois 群 (の群環) に相当するものとして, 一種の Hopf algebra を構成する.

集合  $\{0, 1, \dots, p-1\} \in [p-1]$  で表わし, 加法

$$e + f = \begin{cases} e + f & (e + f < p) \\ e + f - (p-1) & (e + f \geq p) \end{cases}$$

によって semi group になる. 直積  $[p-1]^n$  の元を  $e = (e_0, \dots, e_{n-1})$

で表わす. Pairing

$$[p-1]^n \times W_n(\mathbb{F}_p) \rightarrow \mathbb{F}_p; (e, \alpha) \mapsto x^e = x_0^{e_0} \cdots x_{n-1}^{e_{n-1}}$$

は, 次の "指数法則" をみたす:

$$\alpha^e \cdot x^f = x^{e+f}$$

素体  $\mathbb{F}_p$  上の Hopf algebra  $\mathcal{D}_0$  を次に  $\downarrow$  で定義する.

$$\text{algebra structure of } \mathcal{D}_0 = \mathbb{F}_p[T_0, \dots, T_{n-1}] / (T_0^p - T_0, \dots, T_{n-1}^p - T_{n-1})$$

$$\text{basis } \{ \delta^e = T_0^{e_0} \cdots T_{n-1}^{e_{n-1}} \mid e \in [p-1]^n \}$$

$$\text{乗法法則 } \delta^e \delta^f = \delta^{e+f}$$

coalgebra structure

$$\text{augmentation: } \varepsilon(\delta^e) = \begin{cases} 1 & (e=0) \\ 0 & (e \neq 0) \end{cases}$$

comultiplication は dual を用いて記述する. 万が一

し,  $\mathcal{D}_0$  の dual  $V$  の basis  $\{v^\alpha \mid \alpha \in W_n(\mathbb{F}_p)\}$  を

$$\langle \delta^e, v^\alpha \rangle = \alpha^e$$

で定める.  $V$  の coalgebra structure は  $\Delta v^\alpha = v^\alpha \otimes v^\alpha$

をみたしてやるが,  $v^\alpha v^\beta = v^{\alpha+\beta}$  によって乗法を定

義して Hopf algebra にする. その dual として,

$\mathcal{D}_0$  の comultiplication  $\Delta$  が定まる. 万が一

$$\langle \Delta \delta^e, v^\alpha \otimes v^\beta \rangle = (\alpha + \beta)^e$$

$$\text{antipode: } S(\delta^e) = (-1)^{\sum e_i} \delta^e$$

以上により  $\mathcal{D}_0$  は  $p^n$  次元の Hopf algebra である.  $\mathcal{D}_0 \otimes K$

を  $\mathcal{D}$  で表わす.

対応  $i \leftrightarrow \underline{i} = i \cdot \underline{1}$  により,  $L$  の basis  $\{u^i \mid 0 \leq i < p^n\}$  を  $\{u^\alpha \mid \alpha \in W_n(\mathbb{F}_p)\}$  で表わせば,

$$u^\alpha u^\beta = \tau^{(\alpha, \beta)} u^{\alpha+\beta}, \quad \left( (\alpha, \beta) = \begin{cases} 0 & (\alpha+\beta < p^n) \\ 1 & (\alpha+\beta \geq p^n) \end{cases} \right)$$

$\mathcal{D}$  の  $L$  への作用を

$$\delta^e(u^\alpha) = \alpha^e u^\alpha = \langle \delta^e, v^\alpha \rangle u^\alpha$$

で定義すれば,  $L$  は  $\mathcal{D}$ -加群になる. また

$$\begin{aligned} \delta^e(u^\alpha u^\beta) &= \tau^{(\alpha, \beta)} (\alpha+\beta)^e u^{\alpha+\beta} = (\alpha+\beta)^e u^\alpha u^\beta \\ &= \mu[\langle \Delta \delta^e, v^\alpha \otimes v^\beta \rangle u^\alpha \otimes u^\beta] = \mu[\Delta \delta^e(u^\alpha \otimes u^\beta)] \end{aligned}$$

により, module algebra である. 明らかに次も成り立つ:

$$(2.3) \quad [\mathcal{D} : K] = [L : K]$$

$$(2.4) \quad L^{\mathcal{D}} = \{a \in L \mid \delta(a) = \varepsilon(\delta)a, \forall \delta \in \mathcal{D}\} = K$$

また,

$$(2.5) \quad (u^{-\alpha} \delta^e u^\alpha)(u^\beta) = (\alpha+\beta)^e u^\beta$$

§ 2.2 の  $n=2$  のときを用うと  $D_1, D_p$  は,  $e=(1,0), (0,1)$  に対する  $\delta^e$  である. また (2.5) で  $\alpha=1$  としたものが (2.1), (2.2) に対応し, 然るべき inner 化によってこれに転化するのであった.

一般に  $H$  を有限次元の Hopf algebra とし,  $K$  の有限次拡大体  $L$  が  $H$ -module algebra になるとする. そのとき次の3条件は同値で ([5], [13]), これが成り立つとき  $H$  を  $L/K$  の Galois Hopf algebra と呼ぶ:

$$a) [H:K] = [L:K], \quad L^H = K.$$

$$b) L \# H \rightarrow \text{Hom}(L, L); \quad (a \# h)(x) = a h(x) \text{ が多元環同型.}$$

$$c) L \otimes L \rightarrow L \otimes H^*; \quad a \otimes b \mapsto a \omega(b) \text{ が多元環同型.}$$

ここに  $\omega: L \rightarrow L \otimes H^*$  は  $H$  の作用  $H \otimes L \rightarrow L$  を転化させた  $H^*$  の co-作用を表わす.  $L$  が normal separable のとき,  $H^* = K^n$  についてこれを實現させるものが Galois 群の群環に他ならない. 現在の場合では

$$L \otimes L \cong L \otimes H^*; \quad H^* \cong K[T]/(T-u)^{p^n}$$

ここで  $H^* \cong K[X]/(X^{p^n})$  と見て,  $\{X^i\}$  の dual basis

を  $\{D_i\}$  とすれば, divided powers の方式で,

$$D_i D_j = \binom{i+j}{i} D_{i+j}, \quad \Delta D_n = \sum_{k=0}^n D_k \otimes D_{n-k}$$

により, "加法群型" の Galois Hopf algebra が得られる.

しかしこれは上述の Witt 群の構造と結びつけるのに適当な構成ではない.

$H^*$  はまた  $K[S]/(S^{p^n}-1)$  と同型である. 後者は位数  $p^n$  の巡回群 ( $\cong W_n(\mathbb{F}_p)$ ) の群環であり, その見方で

Hopf algebra を与える. その dual は "乗法群型" の Galois Hopf algebra を与え, これを  $W_n(\mathbb{F}_p)$  の加法と結びつけて

記述したものが上述の  $\mathcal{H}$  である. これは上に加法群型と呼んだものと構造を異にするものであるから, 純非分離的拡大には Chase-Sweedler [13] の意味の Galois 理論で実質

的に異なるものが，少くも2種類存在し得ることになる。

### 引用文献

1. H. Osborn, Modules of differentials I, Math. Ann. 170 (1967)  
221-244
2. Y. Nakai, High order derivations I, Osaka J. Math. (1970)
3. A. Hattori, On high order derivations from the view-  
point of two-sided modules, Sci. Pap. Coll.  
Gen. Ed. Univ. of Tokyo 20 (1970), 1-11
4. T. Kikuchi, Some remarks on high order derivations, 近刊
5. M. E. Sweedler, Hopf Algebras, Benjamin, 1969
6. R. G. Heyneman and M. E. Sweedler, Affine Hopf algebras,  
I, J. of Alg. 13 (1969), 192-241
7. A. Hattori, An application of inner-extension of higher  
derivations to  $p$ -algebras, 近刊.
8. M. Auslander and O. Goldman, The Brauer group of  
a commutative ring, Trans. AMS. 99 (1960)  
367-409.
9. A. Hattori, Semi simple algebras over a commutative  
ring, J. Math. Soc. Japan 15 (1963), 404-419

10. N. Jacobson, Generation of separable and central simple algebras, J. Math. pure appl. 36 (1957), 217-227
11. M. E. Sweedler, Cohomology of algebras over Hopf algebras, Trans. AMS 133 (1968) 205-239
12. E. Witt, Zyklische Körper und Algebren der Charakteristik  $p$  vom Grad  $p^n$ , Crellles J 176 (1937), 31-44
13. S. U. Chase and M. E. Sweedler, Hopf algebras and Galois theory, Springer Lecture Notes 97, 1969.